

# 詩誌 立彩

*Rissai: A Journal of Poems*



第5号  
2014年3月

## 目次

|       |                                                                                   |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| 伊東友乃  | 産んだら 1<br>あこがれ 2<br>かざり言葉 3<br>はら はらっと 4                                          |
| 栗山佳織  | 遠点 6<br>蓬摘み 7<br>楓と祖母 8                                                           |
| 関根全宏  | 夜魚月夜 9<br>ブローティガンによせて 10<br>老いた顔 11<br>ゆうこ 12                                     |
| 高間かさね | おなやみ相談室<br>・・・ペンネーム「かみのこちゃん」 13<br>悲しい池の童話 14<br>どうして 16<br>泣くおんな 17<br>妖精のはなし 18 |
| 渡辺信二  | 魂の鎮魂歌 19<br>あの人へ 20<br>今生の訣れ——反歌 あの人から 22<br>了泉寺の墓地にて 24                          |
| 湯浅友里  | 青の揺り藍 26                                                                          |

|      |      |            |
|------|------|------------|
| 表紙原面 | 鈴木順三 | 『主体なき変換 1』 |
| 裏表紙  |      | 『主体なき変換 2』 |

産んだら

伊東友乃

うんうんと 産んだら  
さみしさが なくなつた

(泡ぶくのように こころに溜まっていたのに)

うんうんと 産んだら

ちよつと 死に ちかづいた

なるほどと思うことが ふえ

分からなくてもいいと思うことも ふえ

この世界の曖昧さを

さらに 愛するようになった

(愛する という言葉とも

いっしょに 生きていこうと思つた)

あの夏の朝 病室のむこう

とおくの草むらで

むかし 捨てたはずの たましいたちが

ゆらゆらと 陽のした 遊んでいたよ

あこがれ

伊東友乃

すこおんと 思いきって  
この空に ぬけてしまえば  
わたしが いっしょうけんめい  
人らしくあろうとして  
あつめてきた 思いの数々も  
まだ 土のおいの残るからだも  
この とうめいな青に 溶けてしまい  
人でないものたちからの  
祝福をうけるかしら  
みようみまねでも  
飛ぶことのできなかった あこがれが  
わたしの 耳うらを  
くすぐって

さあ 今

——世界は おおきなからっぽ  
——というのは 本当なのでしょうか——

## かざり言葉

伊東友乃

かざり言葉が 好きです  
ひらひら はらはらと  
花びらのように  
その影をいつそう  
うつくしくしてしまう  
かざり言葉が 好きです  
いいたいことや 書きたいことを  
かざり言葉のなかに埋めて  
うなだれた気持ち を すこし勇気づけて  
かさなりあつた 重さでは  
けっして あいてに届くことはないのに  
いいえ むしろ 届くくらいなら と  
せつせと かざりつづけ  
えいえんに  
真昼の

かざり言葉の海におぼれてしまいたいのです

はら はらつと

伊東友乃

はら はらつと

雲の切れめから落ちてきた  
ちいさな春たちが

ようやく

はら はらつと

わたしの肩のうえや

赤んぼうのおでこのうえにも

こんにちは

今年もちゃんと

やってきましたね

舌のおくが つんとして

甘酸っぱいものが

食べたくなりますよ

八百屋で何か

買って帰りましょうか

——いよかん、はっさく、ぽんかん  
どれもきれいなあかるい色です——

はら はらつと  
わたしのころから  
春の匂いがします

## 遠点

栗山佳織

原点よりは遠点がいい

缶詰の梨が嫌いなことも

小川が好きなことも

そこにいる魚がもつと好きなことも

遠点まで歩いていけば

つながっているかもしれない

何より名前が大仰ではないし

動かしようのない点より

あるかどうかかわからない点の方が

ボールを投げるみたいで気持ちがいい

遠近法で見てもれば

わたしの好き嫌いも遠点で交わって

そんな点などなかったみたいに

やわらかくミルクのように拡がっていく



## 蓬摘み

栗山佳織

祖母と母と妹とわたしで  
腰を屈めたり、しゃがんだり  
蜜集めのミツバチみたいに丸くなって蓬を摘んだ  
方々へ散らばり互いの顔も見ずに  
蓬のあるところへ移動していく

新芽のやわらかいところば摘んどるね、と祖母が尋ねる  
母もわたしたちも、うん、と答える  
母の声がいつもよりのどかになつて  
祖母の子になり

わたしたちは母の子のまま  
母、子、母、子とつながっていく

眩しい陽射しを拭い顔を上げれば  
祖母の大きなお尻がどんどん膨らみ  
春のみどりそのものとなつていった

## 楓と祖母

栗山佳織

些細なことで破れてしまう皮膚に  
かろうじて守られながら

祖母は八十九回目の秋を迎えている

山から冷たい空気が川を渡り

開業したての施設の

真新しい床の木目をうつくしく磨いていく

機能的過ぎる部屋に似合わない

祖母の身体は

土に還る準備をしているのか

爪先から紫や黒に変色していく

「秋が過ぎて、紅葉した楓の葉が一枚残らず散ってしまうと  
最後に幹が内側から輝くんです」

祖母の身体の中に溜まった蜜で  
薄い皮膚が光り始める

## 夜魚月夜

関根全宏

波間に浮かぶ 金色の月  
夜道を照らす オレンジ色の 灯り

(サイレンが鳴る――)

膨らんだ身体が ライトに照らされ  
黒い半身の影が 伸びたり縮んだり

ここはまるで 透明な海の底

あの 緑色の灯りのむこうに

わたしはわたしの 棲み処を望む

(サイレンが鳴る――)

わたしはわたし 永遠の薄い膜に包まれた

夜しか泳げない 魚のわたし

だけれども いったい誰が

このわたしを

つかまえて くれるのだろうか

## ブローティガンによせて

関根全宏

一九八四年 お前はいつてしまった

——これまでいたところへ／行くだけなのだから

そう言い残し 書きかけの詩を 放棄した

絶望の末に お前が見たもの それは

カリフォルニアの 暗い林のあの家で

ウイスキーを手にするお前を見つけ

顔のない敵から ついに 懐かしい友となり

そつとお前に寄り添い 抱擁し 意気投合した

——わたしはどこへもいきはしない

これまでいたところへ／行くだけなのだから

そう言い残し いきかけの途上で お前はいつてしまった

(遺体が発見された時には 歯型を調べるしかなかった)

おれたちは誓った お前が夢見たバビロンを

ポケットにそつと忍ばせ いつまでも 握りしめると

## 老いた顔

関根全宏

男は娘を失って以来、深い哀しみに暮れる。夜の静寂に哀しみが押し寄せる。暗闇と怒り。進まない、時間。薄れる記憶と、想像。沈黙。そして今宵も、おぼろげな月明かりの中、男は独白する――

ああ 愛しいお前を失い（もう何年経つことか）

おれは一人 夜毎 こうして窓辺にもたれ

おぼろげな 紫色をした あの お前の顔が

いつまでも 消えないように

真夜中の使者に 願うのだ

世界の不公平を 呪うのだ

床の軋む音に、老いた顔が振り返る。暗闇にぼんやりと浮かぶその顔は、呪いの数だけ皺を刻む。男に長年寄り添う女は、今日もその皺を無言の微笑で、ひとつひとつなぞっていく。

ゆうこ

関根全宏

おれたち お前の成長を見ていた  
顔を赤らめたお前の言葉は  
大きくなるにつれ  
子どもらしさを失い  
ときに 顔を背け  
あの日 不意に 途絶えた  
それ以来 沈黙したお前の  
記憶が 薄れぬよう  
哀しみが 癒えぬよう  
おれたち 慰め合い いがみあい  
互いの人生の 不幸を愛し 憎んだ  
声も涙も涸らし (ゆうこよ)  
お前を呼ぶ声は 今日もまた  
新宿高層ビルが見える  
あの待ち合わせ場所に  
おまえを求め 彷徨いつづける

おなやみ相談室・・・ペンネーム「かみのこちゃん」

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

# 悲しい池の童話

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)





どうして

高間かさね

（※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白）

泣くおんな

高間かさね

(※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白)

妖精のはなし

高間かさね

（※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白）

## 夕顔の鎮魂歌

渡辺信二

どこを見ても  
何を聞いても

あまねく あの人ばかりだ  
なのに あの人がない

夕方は 見知らぬ女に あの人かと尋ね  
夜は 暈を搔きむしって あの人を探す  
朝は朝 黄色く白く 紫に咲き誇る  
花ばなを 可憐さゆえに憎む

昼ひなか 突然叫ぶ 突然走る

おれは 狂ったか

おれが鎮めねばならぬのは  
むしろ おれの魂なのだろう

夕顔よ

狂わば狂え

狂わずば 何をよすがに生きよというか

あの人へ

渡辺信二

あの人が時折おれを訪れ  
おれを狂わせる

時には拒み 時には苦しめる

しばしは 2児の母

しばしは オフィスレディ

そして 不意に セーラー服に変わる

あの人 病死し 自死し 事故死する

しかもそれはただの現象

一時的不在にすぎない

いや おれたちのほうに

一時的存在なのかも知れないけれど

なお あの人 短い命を思い 何故ニ死ヌ

だいたい色に染まった西の方へ 何故ニ死ヌ

押し殺した叫びを挙げる 何故ニ死ヌノカ

それとも おれたち

いつかはどこかで  
ともに永遠を見ることができの  
だろうか

## 今生の訣れ

——反歌　あの人から

渡辺信二

あなたは罪の子　わたしは汚れの子  
ともに許されるはずがなく  
手に手を取り合うこともなく  
伏し目がちに別れてゆくのです

会わなければ良かった

とは　でも決して　言いません

悲しみは　ひとときのこと　長く続くわけがなく

また　悲しみ無しに　人は　生きてゆけません

喜びは　必ず　その先で知る

耐えてこそ　苦しみの一瞬が

法悦であつたと分かる

さあ今や　髪を掻き上げ　手を振って  
元気に手を振り　別れてゆきましょう



あなたに会えて良かった　ほんとうに  
会わなければ良かったと思うほどに

## 了泉寺の墓地にて

渡辺信二

つくつんカラスは

お経が寺の本堂で響くと

墓地の隅っこで お供えのトマトをつつく

腐肉でも魚でも 蛙でも何でも食べる

意味不明のお経が

意識不明の胃液分泌を助ける

母や子や写真が墓地を歩くと

カラスも とびとび 歩く

人間たちの動きを見切る

子どもの投げる小石に目をつむらない

お盆さん 茄子に箸指し ステップ

ステップ 精霊馬ダンス

カラスは 人間と違つて

神の使いさえ果したことがある

志を燕雀と共有し

墓の間で  
ステップ

クラスが  
ステップ

身体も魂も  
ダンス  
ダンス

青の揺り藍

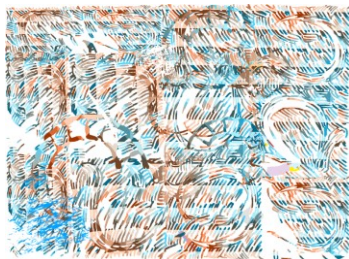
湯浅友里

（※作者に電子版への掲載許可が取れないため空白）









詩誌『立彩』第5号 2014年3月31日 頒価800円

編集発行 「立彩」

〒245-8650 神奈川県横浜市泉区緑園 4-5-3

フェリス学院大学文学部英文学科 渡辺信二研究室気付

印刷 東洋出版印刷株式会社 TEL 03-3813-7311